

# 東京バッハ合唱団 月報

[ 第 515 号 ] 2005 年 5 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732  
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.515  
May 2005

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## 2005 年後半の活動予定

### 団員総会

6月25日(土) 15時30分~17時30分

会場：世田谷中央教会

合唱団の活動の年度を、毎年7月1日から翌年6月30日までとし、6月の最終練習日に団員総会が開かれます。年間の事業・決算の報告があり、新年度の活動が討議される、団のもっとも重要な行事です。

ここ数年は、土曜の午後に総会を開き、終了後の夕方から団友や後援会員、来賓の方々と一緒に創立記念会を祝ってきましたが、今年は下記のとおりの新趣向です。

### 合唱団創立43周年：手づくり懇親会とバザー

6月27日(月) 18時30分より

会場：目白聖公会

参加費：2000円(夕食代を含む)

今年の創立記念会は、団会計の支援を目的に、持ち寄りの食事などによる手づくりの懇親会を計画しています。バザーも同時開催し、《マタイ受難曲》(2007年・創立45周年記念公演)実現にむけて弾みをつけたいと思っています。

団員・団友、後援会の皆様、懇親会へのご参加とバザーのためのご献品等々、ご協力を心よりお待ち申し上げます。詳細はチラシをご参照ください。

### 世田谷中央教会 夏の特別演奏会

7月30日(土) 18時開演

東急田園都市線「桜新町」駅下車4分、入場無料

<演奏曲目>

・カンタータ第137番より

冒頭合唱 ほめよ主を 強き栄えの主を

二重唱 ほめよ主を 巧みになれを造り (S/B)

コラール ほめよ主を その聖きみ名を

・宗教歌曲 BWV507 愛するわが羊 いずこに迷いし

・カンタータ第85番《われは善き牧人》(全曲)

・カンタータ第147番より

冒頭合唱 心と日々のわざもて

コラール イェス わが喜び

<演奏者>

合唱：東京バッハ合唱団

ピアノ：内山亜希

指揮：橋本眞行 (BWV137, BWV147)

大村恵美子 (BWV507, BWV85)

### 野尻湖合宿と神山教会特別演奏会

合宿：8月4日(木)~7日(日)

演奏会：8月6日(土) 19時開演、入場無料

合宿は、どなたでもご参加いただけます。湖畔の神山教会コンサートでは、去年にひきつづき、アルトの佐々木まり子先生に2曲の独唱カンタータを歌っていただく予定。

夏休みに信州方面にお出かけの方は、今から計画にお加えください。

<演奏曲目>

・カンタータ第54番《抗え いざ罪に》(アルト独唱)

・カンタータ第85番《われは善き牧人》(合唱+斉唱)

・カンタータ第169番《神にのみ わが心献げん》

(アルト独唱+合唱コラール)

・カンタータ第147番より(合唱)

冒頭合唱 心と日々のわざもて

コラール イェス わが喜び

<演奏者>

アルト：佐々木まり子

合唱：東京バッハ合唱団

ピアノ：内山亜希

指揮/訳詞：大村恵美子

### 第98回定期演奏会

12月17日(土) 16時開演

会場：石橋メモリアルホール

<演奏曲目>

・カンタータ第123番《いとし インマヌエル》

・カンタータ第192番《ああ感謝せん 神に》

・カンタータ第197番《主 かたき望み》

・合唱 あだは 今しも退けらる

《クリスマス・オラトリオ》第64曲

<演奏者>

ソプラノ：光野孝子

アルト：佐々木まり子

テノール：佐伯雅巳

バス：渡邊 明

オルガン：草間美也子

管弦楽：東京カンタータ室内管弦楽団

合唱：東京バッハ合唱団

指揮：橋本眞行 (BWV123, BWV192)

大村恵美子 (BWV197, W=064)

## 森井眞先生出版記念祝賀会

中西 碧（団員：ソプラノ）

3月26日、桜新町のレストラン胡麻屋で、合唱団創立以来今日まで一貫して合唱団をお支えくださっている森井眞先生の『カルヴァン ある運命』出版記念祝賀会が開かれた。

先生はつぎのようなご挨拶をなさった。

「16世紀はプロテスタントとユマニズムが人間を解放すると信じられていた時代だ。当時カトリックは人間を抑圧する力となっていたが、カルヴァンは人類と人間の解放を求めた男であり、カルヴァンほど誤解され、真に知られていない人もいない。今回私は、カルヴァンの人物を明らかにするために、書簡のすべてを読みなおした。書簡のなかにこそ人間性があらわれてくるからだ。ぜひこの本を読んで人間カルヴァンを知り、人類のひとりにつらなってほしい。現代の社会で、人類の歴史のなかで、今いちばん大切なことは戦争をしないということだ。」「きょうは合唱団の諸々のお祝い会でもあると聞いている。合唱団の創立以来のまとまりを思うとき、もちろんバッハの偉大さがあるだろうが、創立者の情熱と人間性と、それを支える団員方の情熱と人間性に敬意を表したいと思う。」

その後、たくさんのお客さまから祝辞が述べられた。後援会の白木博也氏（画家）は、自作のカルヴァンの肖像画を持参され、「いまの世の中は人間らしさを発見しづらい。しかし森井先生は不正や不合理を糾弾し、良いものは絶賛される。たいへん人間らしい人物でいらっしゃると思っっている。今回、ご著書を読ませていただいて、カルヴァンの人間性と先生の人間性を重ねて理解させていただいた」と話され、絵をプレゼントされた。

また森井先生のご友人であられる久（ひさし）威智・初枝様ご夫妻もご出席くださったが、久氏は「カルヴァンの人間らしさを再発見させていただいた。“ある運命”というサブタイトルに、人間くささが出ていると思った」と話された。

団友の戸口幸策氏は、「いちばん大切なことは戦争しないことだ、というご発言は素晴らしい。戦後すぐに兄が死んだ。特高に引っ張られて帰ってきたときは瀕死の状態だった。戦争は絶対してはいけない。」「キリスト教徒は歴史的にたくさんの悪いことをしてきたが、きょうは積極的な存在を知ることができた」と述べられた。

森井先生が共同代表をつとめる「報復戦争に反対する会」の事務局からも西野氏と佃氏が出席され、「わたしたちの集会では、いつも森井先生に閉会のことばをお願いする。それを聞いて、多くの若い人々から先生のお話への感激のアンケートが寄せられている」というご報告があった。また後援会員の野村勝時氏からは「85歳で膨大な全書簡に目をとおされ、本をお書きになったことは素晴らしい。著書からは、先生の人間でありたいという叫びが聞こえてくる」というお話がされた。

その後も、後援会員の桜井征夫氏、元団員の森延幸氏、川戸龍夫氏らの祝辞がつづき、明治学院大学OBの徳増英一氏は「わたしども森井ゼミの卒業生は、先生を囲んで10年あまり勉強会をつづけている。このたびの出版原稿の清書をその仲間が受けもたせていただいた。清書作業のなか



2005年3月26日、桜新町・胡麻屋（写真提供：森延幸氏）

で、講義では見えなかったものを学ばせていただいたことは幸いだった」と述べられた。

最後に大村恵美子先生が、あらためて参会のみなさまに副指揮者橋本眞行氏を紹介され、また合唱団のPRをさせていただきます。

終始なごやかなお祝い会だった。わたくしども団員もご本にサインをいただいて、満ちたりて家路についた。

## 東アジアミッション 120周年 富坂キリスト教センター30周年記念会

2005年4月23日、午後3時 -  
富坂キリスト教センター

大村 恵美子

東京バッハ合唱団の過去4回のドイツ演奏旅行で、必ず中心となって迎え入れてくださったのが、ドイツ東アジアミッション（DOAM）であり、故グンドルフ・アンメ牧師も来日のたびに東京で滞在されたのが、DOAMの活動のなかで設立された、この富坂キリスト教センターでした。同センターは、日本と海外諸国のキリスト教の交流のために、幅ひろい学際的な研究をおこなって、今年で30周年を迎えられました。初期には、深津文雄牧師も活躍された所です。

その記念会に、お祝いの音楽を献げることを依頼され、私たちは最適と思われるプログラムを用意して、今日その任を果たすことができました。

鈴木正三センター総主事の開会の祈り、武田武長センター理事長の挨拶のあと、

- 1) ピアノ独奏：渡辺敏生、バッハ《フランス組曲》第6番 BWV817 よりアルマン、ガヴォット、ジューク。
- 2) 合唱：東京バッハ合唱団、指揮・大村恵美子、ピアノ・渡辺敏生、バッハ・カンタータ BWV194（献堂式用）より合唱 大いなるこの日 新たな宮を、コラール わがなせるわざ み旨のままに、カンタータ BWV147 よりコラール イエス わが喜び

を演奏。そのあとの記念講演、パウル・シュナイズDOAM理事長「日本におけるDOAMの歴史」を、スライド紹介とともに、興味深くうかがいました。米英の宣教運動と

はまた違った、ドイツ人の異文化交流に対する、内省的な観点を知ることができ、また同じ敗戦国としての苦悩を分かちあう歴史でもあったことを思い、感無量でした。

開会前の個人的なごあいさつで、シュナイス氏（ハイデルベルク在住）は、合唱団に、またドイツに歌いにきてくださるのをお待ちしますと言われ、ひとえにお頼りしてきたベルリンのアンメ牧師を失って、失意の中にいる私たちに、励ましが与えられました。

富坂キリスト教センターの成果を、とても控えめな感じでご紹介されましたが、宗教・文化・社会の諸問題を、ドイツ・中国・韓国その他諸外国の研究者たちとともに研究討論をかさね、その成果として何冊もの本を出版してこられたセンターの役割は、たいへん大きなものだったと言わねばなりません。

私も加えていただいている「日本ボンヘッファー研究会」も、今日あつまった鈴木正三、武田武長、南吉衛、村上伸氏らをメンバーとして、ここ富坂キリスト教センターを拠点に、活発な活動をつづけています。そのことが今日の演奏実現のきっかけともなったのでした。

合唱団で、カンタータ第 194 番（献堂式用）の楽譜が昨年秋に出版され、その昔、三軒茶屋教会（1985 年）や足利教会（1987 年）の献堂式記念に歌わせていただいたのを復活させて、今回からまた年に 1、2 回ずつでも、そういう機会を得たいと願っております。

会堂新築にかぎらず、教会や文化団体のおりおりの記念行事に、カンタータ第 194 番を中心に、それぞれの機会にふさわしいバッハの音楽を携えて、祝賀の席に参加させていただくことを、合唱団の今後の喜びのひとつに加えたいと思います。どうぞ、ご希望がありましたら、なるべく早い時期にご相談いただけますよう、お待ちしております。

今日のように、参加させていただくごとに、日本中の意義ある施設の誕生の歴史を知り、その発展をともに祈らせていただけることは、合唱団の存在にとっても、すばらしい影響となることでしょう。

今日の記念会は、このあと、話し合い、馬頭琴の演奏とつづき、午後 6 時半からは、文京区シビックセンター 26 階スカイホールに会場を移して、会食、歓談となる、大がかりな催しだったのですが、私たちは、シュナイス氏の講演をうかがったあと、退出しました。さわやかな初夏の風とともに、美しい記憶として心にのこる一日を、ありがとうございました。

## 高齢で合唱が続けられるか（唐沢 昌伸）

我孫子の男声合唱団アンサンブル・レオーネの指揮者、唐沢昌伸氏が 1 月 5 日から半年間英国で勉強しており、下記はレディングでの合唱体験のひとつである。（山下広之）

今回、イギリスに来た一番大きな目的は、「年をとっても歌いつづけるには、どうしたらよいのだろう」という大命題に対するヒントを探したかったのですが、ものすごいものを見つけました!!!

ベーシングトークといって、レディングから鉄道で 15 分くらいのところの 100 人くらいの合唱団で、はっきり言って、あ

まりうまくない。モーツァルトのレクイエムをやっている。1 回目に行ったとき、テナーの最後列にすわって歌い始めたのですが、1 曲歌い終わったら、2、3 人先のお爺さんが、なんとも言えない嬉しそうな、やさしい目で、僕のほうを見た。ものすごく気になったので、2 週間後に行ったとき、こんどは隣で歌ってみた。そして、休憩時間にいろいろ話をきいてみた。

ボブ・スミス、今年で 90 歳。8 歳のとき、教会の聖歌隊で歌い始めた。以来 82 年間歌っている。となりで歌っているからわかるが、90 歳でも音程は確かで、リズムもそこそこ正確。だけど声はへろへろ。ただ、正確な音程で、癖がない声なので、合唱の中に完全に声が融けている。

「自分は、もうあまり立派な声は出ないが、近くでうまい人が歌ってくると、自分の声が共鳴して鳴っているのが身体でわかる。それがうれしくて、合唱をつづけているんだ。」「前回、お前さんが来たとき、これはいいねって思ったよ」と。

ああ、それが、あの目だったんだ。

左耳が聞こえないので、指揮者が言うことはあまり聞き取れない。でも、音楽がはじまると、周り完全に調和する。となりで歌っていると、波長が合って声が聞こえてくる。一人で歌っているとへろへろのようだが、みんなと一緒にになると、声にピンとした芯ができる。すごい!!!

こどものときから培われた音感があるからできるのかもしれないが、正確な音程、リズム感を磨きつづけるというのがあったからこそ、年をとっても、若い人に支えられながら、音楽を楽しめるのだなあ、と思いました。（支える若い人も必要で、重要？）それと、歌っているときの姿勢が良い！しゃきとしていて、とても 90 歳に見えない。この共鳴体があるから、こういう楽しみ方ができるんだと感心しました。

年をとって声でできないから、もう合唱はできない、と思いがちですが、そうではない、ということを示して証明してくれています。やはり、磨きつづけることなんだ、と思いました。ボブ、ありがとう!!

## □ 新刊紹介 □

笠原芳光・佐藤 研：編著

『イエスとはなにか』（2005 年 2 月、春秋社）

大村 恵美子

恵贈された新刊書を、この月報ですべて紹介するつもりはないのですが、このところどうしても放っておけないようなご本のプレゼントがあいつぎ、新刊紹介が重なってしまうのを、おゆるしくください。

編著者のおひとり笠原芳光氏とは、学生時代の私が、ふとしたことから、牧師というよりもむしろご近所の知人という感覚で個人的なお付き合いとなっていた赤岩栄氏の教会でお会いし、集会などで一緒に時間をすごした方々の中でも、現在にいたるまでいちばん親しくしていただいています。このたび、森井真氏の『カルヴァン』と同じ日に、笠原氏からこの本が届きました。

とてもおもしろく、これもまた一気に読了させていただきました。ほかに 6 人もの方々が登場して、座談の形で進められています。皆さんそれぞれの分野で新しい視野をお持ちで、その人選も、対立ではなく、共通項を重んじられ

た感じですが、それにしても、いく分ずつは立場の違いもあり、私としては、さて、どこに落ち着くのだろう、と経過をみまると、笠原氏が発言され、それで安心する、ということのくり返しでした。そうしながら、まだまだ未知で無名の<ナザレのイエス>に迫ってゆく、という、なかなか楽しく貴重な内容に溢れた、企画大当りのご本です。

全部読んでみて、いろいろ取り上げられた古今の人物のなかで、最重要のひとりに挙げられたのが J. S. バッハだったように思います。これはバッハを歌う合唱団にとって、聞き捨てならないことでしょう。座談の面白さと、注目すべき箇所を、笠原氏の発言を中心に、ごくわずかですが引用しておきます。ぜひ多くの方々が読んでくださることをおすすめします。

笠原 ……ニーチェも『アンチ・クリスト』のなかで、「イエスは神と人とのあらゆる隔絶を否定した。彼は神と人との一致を、その福音とした」と言っています。ニーチェはキリスト教を徹底的に批判したため、イエスがわかったのだと思います。(P.49)

笠原 ……死ぬまで十分に生きることが大事なんです。十分というのはなにも大いに仕事をするとか、そんな意味ではなくて、死ぬまで生きてよらしいということ。あとは天国とか地獄とか浄土とか、そういうことは一切考える必要はないんだ。それでよらしい。それを「大肯定」と言っているんです。(P.59)

笠原 ……弟子は生前にもイエスを誤解して、死後もイエスを誤解した。にもかかわらずそういう誤解した弟子が書いたなかに、やはりイエスの真相が少しは表れている。それが歴史のアイロニーだ。(P.64)

(以上「第1部 聖書学から」、荒井献氏および共編者佐藤研氏と)

笠原 吉本さんは精神の深さというか、倫理の深さということをおっしゃって、いま佐藤さんは魔的なもの、あるいはヌミノゼとおっしゃったのですが、マルコはそういうのを書き、マタイやルカも書いたのですが、それはイエスにそういうものがある、それが単なる倫理、単なる宗教ではないかたちで現れて、それに人々が感動したのではないか。(P.109)

佐藤 ……私は「弟子を集めた」という観念そのものが後代の観念だったと思います。イエスの場合、もっと一線に並ぶような発想でしょうから。

笠原 それはイエスは弟子に対しては同志というか、同じような立場の人間だというふうに見ていたことはたしかです。(P.119)

(以上「第2部 思想から」、吉本隆明氏および佐藤氏と)

笠原 ……ゴッホでもルオーでも自分の姿を描いて、それをイエスになぞらえるということは考えなかったと思います。……イエスというのは歴史的にはこうで、神学的にはこうだというのではなく、本来の人間、人間の根源というものだ。それを徹底的に自画像を描いていくな

かに、人間の根源的なものが現れてきたら、それが思いがけずイエスに似てくるというようなことではないでしょうか。(P.212, 213)

笠原 ゴッホはイエスを匿名化したと思います。だからそういうものがこれからの一つのあり方もかもしれない。そしてそういうゴッホの宗教性ということはあまり言われてなかったのではないが。

木下 そうですね。若いときに牧師でありたいと思いこんでいながら、制度としての教会からはじき出され、それでもなお信仰のあり方、宗教のあり方を求めつづけて絵を描いたというのがゴッホです。……彼の絵は、教会という制度が権威づけて語る言葉では見つけられない宗教のあり方を告げている……

笠原 ……これからわれわれが行くべき道のような気がしますね。宗教というものが、ある意味でそうなっていくのではないか。宗教が美術になったり、音楽になったりして、深いものが表されていくという。(P.222, 223)

磯山 ……バッハにおいては 20 世紀に展開されてくる人間イエスの視点が先取りされている、と言えるのではないのでしょうか。……バッハ自身の上演に登場したイエスも、重々しく歌う存在ではなく、軽やかに語りかける存在であったのではないかと思います。

バッハの作品において、イエスは畏怖の対象というより、愛の対象です。魂とイエスの愛の二重唱は、バッハの生涯を通じてあらわれる、カンタータの華です。(P.232)

磯山 ……バッハにとっての信仰は絶えずとらえ直されるものであって、懐疑や苦しみのなかから再獲得されていく形で存在していたのではないかとと思われるのです。そういうバッハの柔軟性が、宗教的にも思想的にも異なった環境にいるわれわれにも訴えかけるのではないのでしょうか。(P.234)

(以上「第4部 芸術から」、木下長宏氏、磯山雅氏および佐藤氏と)

笠原 ……「イエスは隠された名前である、キリストは明らかな名前である」(1945年にエジプトで発見されたナグ・ハマディ文書中の「フィリポによる福音書」)……かりに有名になっても、無名性が備わっている人というのは、私は本当の人間だと思うんですよ。無名性とは何かというと、自己否定、権威や権力を求めないことだと思う。……この「隠された」というのと「明らかな」というのは、なかなか本質を突いているように思います。キリストとして有名だけれどもイエスとしては無名である、ということにも解される。(P.264, 265)

笠原 私は生まれ変わりも信じてないので、死んだらよらしい、死ぬまで生きる、と。だけれども、それは、人間というのはそういう形で続いてきた存在だということからいうと、ある意味では永遠な存在でもあるとも言えるわけですよ。(P.279)

(以上「エピローグ」、佐藤氏と)

<了>